

水谷一裕教授送別の辞

武者 芳朗

東邦大学医学部整形外科学講座（大橋）教授

水谷一裕教授は、平成24年3月31日をもちまして東邦大学医学部整形外科学第2講座教授を定年退職されることとなりました。先生は、昭和48年3月、東邦大学医学部をご卒業後直ちに整形外科学講座、茂手木三男教授のもとに入局され、大森病院に勤務されました。「手の外科」をご専門にご活躍され、昭和60年に当時「腕神経叢引き抜き損傷に対する肋間神経移行による再建術」の最先端を走っていた順天堂大学、山内裕雄教授のもとに研修されました。昭和62年9月整形外科学講師、昭和63年から当時研究室であった大橋病院に勤務されました。平成4年、平澤精一教授のもと整形外科学第2講座が開設され、水谷先生は平成10年から同講座教授に就任されました。

先生は、昭和59年4月、私が入局時の指導医であり、以来27年間、公私ともにお世話になっております。当時、先生は「手の外科」がご専門の術者でありましたが、生化学や病理の知識にも長けておられ、私の苦手な代謝経路や組織染色のお話ばかりされておりました。勤務初日の宿題は「尿酸の代謝過程の化学式を暗記しろ」でした。とりあえずノートに化学式を書いて提出しましたが、Harper著の「生化学」の教科書を読めと言われ、入った医局を間違えたかと思いました。先生は筋肉の研究をされており、私も必然的に基礎研究の世界に引き込まれ、実験研究の大切さを教えられました。今日、生体材料の実験研究を続けておりますが、そのきっかけを作っていただいたのは先生でした。手の外科では平澤教授、飯野龍吉先生とご活躍されており、繊細で、理論的な末梢神経や腱の手術、micro surgeryを拝見する機会も得られ、私の今日に繋がっております。平成12年12月からは、私も整形外科学第2講座に移籍し、再び先生の傘下に加えていただき、早11年になりました。

当初はなにぶんマンパワーが不足しており、先生自ら教室責任者として孤軍奮闘されておられました。医局員には気を使い、十分な休暇もとらせ、学会や手術といえば外来を代わり、わがままを許しておられました。夏季休暇もとらず、休日も出勤され、平日は終日外来勤務と厳しい日々

を過ごされておりました。もともと誠実で高潔なお人柄ですから、何事にも表裏がなく、偽りもなく、正攻法をもって数々の艱難辛苦を正々堂々と乗り越えていらっしゃいました。当講座のために、歯を食い縛って、耐え忍んでいらっしゃるお姿も拝見いたしております。そんなご多忙のなか、多数の学会の理事、評議員を歴任され、第21回東日本手の外科研究会（平成19年1月）、第19回日本レーザー治療学会（平成19年6月）、第33回日本運動療法学会（平成20年6月）、第21回日本運動器リハビリテーション学会（平成21年7月）を主催され盛況を博しました。またここ数年、新入医局員も多くなり、ご苦労が報われる時がやってきております。先生のご尽力の賜物と喜んでおります。

ご健康についての具体的なご様子は、ご本人からはわれわれに心配かけまいと一切お話ししていただけませんでした。最近、ここ2年間ではようやく2、3日間ではありますが夏季休暇をとられるようになり、山歩きや写真などの趣味を楽しんでおられるようで、医局員一同安堵いたしております。平成23年5月の新入医局員歓迎の医局旅行では、われわれに新緑の八ヶ岳を見せようと、宿泊先はもちろん分刻みのスケジュールで散策コースや休憩所、お弁当に至るまでのすべてを企画していただきました。新緑の中の温泉、カラオケ大会、サプライズのお弁当、本当に楽しかったです。思い出深い記念旅行になりました。常に医局員の一人ひとりに家族のような暖かいお心遣いのご指導をいただき、一同、感謝いたしております。先生がすべてをかけて育て上げ、守り抜いた整形外科学第2講座を受け継ぐにあたり、先生のモットーである「和を以って尊しと為す」の精神を肝に銘じ、医局員一同、仲むつまじく、助け合い、切磋琢磨しあい、立派な医師を目指して精進し、第2講座の発展こそが先生の願いと受け止め、さらなる飛躍を遂げんとすることをここに誓います。

永きに亘り、お疲れ様でした。先生のご健康とご多幸を一同心から祈念いたしております。これからもお気軽にお立ち寄り下さい。皆で、先生の医局でお待ちいたしております。